

# もののけの子

雪谷

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

起きたら幼児になってた元大学生がチート通り越して理不尽な転生をするはなし。

※残酷な描写は予告なしで入ります。アンチ・ヘイトは保険。

※原作突入長が遠い。

# 目次

プロローグあるいは分岐点	1
聖騎士と捨て子の出会い	7
捨て子のちから	15
能ある鷹は爪を隠すが捨て子は研ぎ澄ます	22
捨て子と秘密の地下室あるいは本性のひとかけら	28
捨て子と悪魔の子の入学式	34
悪魔の子は捨て子を恐れる	42
初めての渾名と勉強	49
小さな結び	57
初めての学校生活	64

聖騎士の独白	71
捨て子の帰郷と双子	76



# プロローグあるいは分岐点

目が覚めて、意識がハッキリすると幼児になつてた。

意識がハッキリするまで大分時間がかかつていた気がする。

私の名は白鳥 待雪<sup>まつゆき</sup>20+5歳だ。双子の弟がいて、弟は零二という。

ちなみに眠る前は三流大学の学生だった。どんなバカでも入れて卒業できると有名で、金だけは馬鹿みたいに掛かるところだった。

……おかしくね？

リアルコナン体験より一月でわかったことがある。

ここはいままでとは違うところだということだ。詳しく言うと、なんかそこら辺に黒くて丸い生物が漂っていて父親らしき人にはそれが沢山群がっていた。

どこかで見たとような景色だ。

これ、コイルタール 魍魎か？

魍魎は青の祓魔師に出てくる下級悪魔だ。

まさかそんな私の目は節穴だったか？そう思つて挙動不審な行動とつた結果捨てられた。

突然すぎるって？

突然捨てられたんだから、前以て伝えられるわけないだろ。それに捨てられたのは山奥、白鳥家の別荘だ。

この別荘とその他諸々を手切れとして残して去つていった。いや、自分でも気味の悪い子供だったと思うから、恨みとかないけど。

ネット環境完備してあるし、成人までなに不自由なく過ごせる金（手切れ金）もある。暫くは安泰だ。

「あ、（こゝ）青の祓魔師の世界か」

捨てられた翌日、朝の散歩に出掛けて3分後出会つた怪異によつて現実を思い知らされた。

二つに避けた尾に、3mはあろう巨体をもつ猫又。

「おはようございます」

『……お早う』

「今日雨降りそうですか？」

『もうすぐ嵐が来る』

「え!？」

野生の勘とはなめてはいけない。髭をぴくぴく動かし鼻をすんすんと可愛らしく動かす猫又様の行動は、雨の臭いがして湿度の変化も感じているらしい。

ここはおとなしく帰ろう。

「ありがとうございます、空の神様。今度ねこ缶御供えしますね」

『うむ、くるしゅうない』

急いで帰ろう。ここが青の祓魔師なら、あの猫又様は忘れ去られた神であろう。

プライドもたかいだろうから、天気を教えてもらったことをふまえて空の神様と命名。

とりあえずお腹すいたから帰ったらご飯を食べよう。

あのあと、本当に嵐が来た。

酷いものではなく、二日ほどで過ぎ去ったため特に支障はでなかった。

今は何をしているかと言うと、若干5歳料理してます。

台とか小さめの調理器具も確りあるので、快適にスローライフおくらせてます。

カリカリカリ

「ん？」

なにかを引つ掻く音を聴き、バルコニーを見てみると空の神様がいらつしやった。

初めてあったときは3m越えで貫禄あるお姿だったけど、今は子猫サイズである。

テーブルには私のご飯がすでに並んでいるので、その向かい側に置いてからバルコニーへ続くドアを開けた。

足拭きで器用に泥をぬぐって、ぴよんぴよんとテーブルにつくと尻尾で早くと急かされる。

お皿にお高い猫のご飯を入れて、水を用意。



「頂きますー！」

『頂く』

1日に1回はご飯を共にする空の神様。

子猫サイズだとても可愛らしい。

でもあの巨体もすてがたい。あの巨体に顔を埋めてお昼寝したらきつと気持ちいいにきまつてる！

### 閑話休題

今日のメニューは味噌汁と白米、秋刀魚の塩焼きに梅干しだ。

私は自他ともに認める梅好きである。秋刀魚も好きだけどつい梅を食べ過ぎてしまう。

ふと、視線を感じて空の神様を見ると、秋刀魚をじいっとみつめていた。

箸で半分に切って、頭の方を既にからの皿へうつしてあげると嬉しそうにはぐはぐ食べる。

私も嬉しくなって、残りを食べた。

『美味であった』

「ありがとうございます！」

『今日は先の嵐によつて緩んだ地も固まったゆえ、山を案内してやろ』  
「急いで準備してきます！」

やった！

やっと外出許可でた！

あの嵐が去つたあと、空の神様は私の家に来て暫くは危ないから外に出るなど釘を刺され、結界らしきものもはられていたため外出出来ていなかった。

なので楽しみです。

「お待たせしました！行きましょう！」

『うむ』

## 聖騎士と捨て子の出会い

空の神様に連れていってもらったのは、大きな祠だった。

今は人も何も来ないと言って、息を一吹きすると雑草や汚れが消え失せお供えものが現れた。

『山の麓には村があつての、そこに新たな祠を建てたようじゃ。腹が立ったゆえこうして供物を貰い受けておる』

「うわあ、A5ランクのお肉ですよ！大切にされてますね」

『うぬ、たまに夢に出てやつての、嵐を教えてやるのだ。そうすると暫く逃げるのだが、帰つてきおるとたんまり美味なる供物を供えおるのじゃ』

そのあと、特別に祠に入ることを許してもらえた。これからも会いたくなれば来るとよい、と許可も貰えてとても嬉しいです！

そのあとは、悪い悪魔が封印されている場所を教えてくれて、気を付けるのだぞ、と心配してくれる。

『ぬしには護身術なるものを授けようのう』

「ありがとうございます！」

この山に住む新入りだから、気を掛けてくれているのかも。空の神様は神様の鑑だな！

あとなぜかお供えに上がっていた、拳銃や狙撃銃を譲ってくれた。

ご飯のあとは空の神様と訓練するようになりました。

この山に捨てられ一月、初めての嵐以来大きな天気の流れはなく平穏に暮らしていた。

一月もたてば五感も人外と化してきて、空の神様に教えてもらった体術や聖法もいたについてきた。

聖法とは、諸説あるけどこれは語感で付けただけらしく、聖なる力を使って行使するものだ。簡単に言うとうと光の魔法みたい。

「遅いなあ……」

ひとり呟くが返答はない。いつもであればこの時間帯だと空の神様がいらして夕飯を食べている時間なのにいらつしやる気配もない。

それに今日はやけに静かだ。

動物たちの鳴き声や足音、羽ばたく音がない。聞こえるのは潜めた息と水の流れる音や葉の擦れる音だけだ。

何かおかしい。

人が山に入ってきたのか？

家から飛び出して五感を研ぎ澄ます。

聞こえるのはこもった轟音、地から湧き出る血と硝煙のの臭い。肌で感じる恐怖と殺気。

何かが起きている。

「すぐ行く」ね、空の神様」

それより少し前、空の神様とよばれる猫又は祓魔師と対峙していた。

『何のようじゃ、人の子。わらわは忙しいのだぞ』

「いやー、悪いな。俺あ藤本獅郎、白鳥家の子供捜してんだ」

『子供とな。それは知らぬ、捨て子ならおるが』

「あん？」

『自ら申しておったの、己が悪いとも』

藤本獅郎は己の持つ情報と猫又の言葉に思うところがあるのか、片方の眉を上げ少し考え込んだ。そのとき、藤本獅郎の後ろで警戒していた祓魔師たちが痺れを切らし発砲した。

「おい待て！俺が良いと言うまで待機と言っただろう!!」

『聞こえておらんな、この辺には悪い悪魔がようでおる。その影響よのう』

「呑気にしてねーで、手伝え！」

『やれ、横暴な』

そう言いながらも手伝おうと背筋を伸ばした。そのとき。

ガサガサ、バキ、ガサ

「ん？」

何かがものすごいスピードで近付いてくる音が響き錯乱していた祓魔師たちも、何事かと静かになった。

場に静寂が訪れた時、その空気は幼い声にぶち壊された。

「空の神様ー!!」

『おお、雪。寂しかったかや』

飛び出してきたのは5歳ほどの幼児。さすがに正気に戻るが、逆に混乱し始める祓魔師たち。

それもそのはず、巨体を誇る上級悪魔の猫又に幼児が抱き付いて離れないのだから。

「空の神様、もう夜なのに来ないから心配しました！」

『すまぬ、こ奴等がなかなか帰らぬのでな』

「俺のせいだよ」

幼児はその時初めて藤本獅郎率いる祓魔師たちに目を向けた。その目は今まで猫又に向けていた親愛などかけらもなく、まるで不審者や略奪者でも見るような殺伐としたものだった。

「…………おじさんたち”帰って”よ」

大きくも小さくもない幼い声があたりに響いたとき、幼児の真つ赤な瞳孔と光の加減で虹色に光る虹彩が怪しく瞬く。

そしてその一瞬あとに祓魔師たちは麓の村へと、ほおり出されていた。

「!?、なんだこりやあ。あのガキ、許さん!」

「ええ!またいくんですか? 聖騎士様あ……」

「たりめーよ!」

「「はあ……」」



村人たちの怪訝な目などないかのように、広場に張つてあるテントへといそぐ。

この村人たちは、あの猫又をいまだ崇拜している。

そのため祓魔師たちを邪教の乱暴者だと影で囁きあつては、早く出ていけ今すぐ出ていけと目で語るのだ。

新しい祠を建てたことで怒つた神は、悪魔に堕ちてしまつたがいまも関係は変わつていない様子に藤本獅郎は、感心しながら翌日に備え眠りについた。

「しかし写真通りのガキだつたな」

取り出したのは無表情の幼児の写真。

赤い瞳孔に光の加減で虹色に光る虹彩。一度も切られたことのない背までのびる藍色の綺麗な天然パーマは、先ほど見た幼児と一致していて決定的に違ふのはその表情だつた。

事前に教えられていた白鳥 待雪の情報では、一度も表情を動かすことなく自分から何かを求めることもなく、ただ静かに生きてるだけ。

それがどうだろうか。

猫又の巨体に向かって飛び付き、心配したと言い、空の神様となつている悪魔を守ろうと祓魔師たちを追い出した。

「こりやあ要検討だな」

## 捨て子のちから

『雪よ、ぬしは言霊使いだったか』

言霊と言えば妖怪のサトリを思い出すけど、私は人間のはずなのでピンとこない。このサトリすらここでは悪魔として存在していそうなもので迂闊なことは言えない。

「言霊使いですか？」

『強い言葉の力で森羅万象なるものを操るのじゃ』

「すごいですね！でもこれで空の神様にお返しができるので嬉しいです！」

森羅万象とは強く出た。

私自身に特殊な異能が備わっているのであれば、空の神様のために使おうとなんの躊躇いもないけれどその前に私のことを調べる必要があるかもしれないな。

『そうかそうか、では夕餉としよ』

「はー！」

子猫サイズの空の神様を肩にのせて、お喋りしながら帰る。道中山菜を摘みながらも明日、彼が来たら話くらいは聞いてやろうと考えながら。

次の日、朝の散歩と昨日の復習を終えたあと、私は本職さながらの設備を設えてあるデスクに向かっていた。

何をしているかと言うと、クラッキングである。クラッキングとはコンピュータネットワークに繋がれたシステムへ不正に侵入したり、コンピュータシステムを破壊・改竄するなど、コンピュータを不正に利用すること（これは犯罪のため良い子たちは絶対にまねをしないように）。

ここは青の祓魔師。ならば原作知識を知っている理由を作らなければ、いつか墓穴を掘ると思った。

それに私の特殊技能のこともあるので、あちらさんの弱味とかほしい。片っ端から機密をコピー&痕跡抹消。

……こんなやわな構成で大丈夫なのかこの組織。

カリカリカリ

「！、今行きます！」

私の住む別荘は3階建てで、1階は壁をぶち抜いたワンフロアで50畳…よりはひろいかも。ここは主な生活スペースとして使っている。

だからたつぷりとした白の天蓋付きベットやカウチ、猫足のテーブルにロッキングチェアや暖炉、生活用品などがある。

2階は主に本棚が占拠していて、あるのはソファと給湯室もどきだけ。あと客間もこの階にある。

3階は屋上に続く階段がある。あとは趣味嗜好を楽しむための物などがところせましと積んである。ちなみにデスクもここだ。

と、説明はここまでとして急いで空の神様を入れて差し上げなければ！

「どうぞ、空の神様」

『うむ』

パタン

「……っておい、俺は無視か!? 入れてくれよ!」

そう叫んで勝手に入ってきたのは藤本獅郎。ちよつとムカついたから顔めがけて濡れタオルをぶん投げた。

「おじさん、それで汚れ払ってから入ってね」

「つたく、可愛くねえガキだな」

さて、ご飯にはまだ早い時間だ。しかしこの頃冷えてきたから空の神様にホツトミルクをだす。猫舌でも問題ないように適温にしてある。

『ありがとうの』

「いいえ、どうぞこの敷物を使ってください」

『おお、暖かじゃ』

「おじさんは向かいの椅子ね」

とりあえず食卓テーブルに皆でつく。

(気持ちの差が対応の差か……)

「さて、ご用件は？」

「……はあ、ここに来たのはお前のことについてだ」

「この山の悪魔たちを祓いに来たというならば徹底抗戦の構えだ。情報戦線では負ける気がしない。

詳しく聞くと、後になって零二にバレたらしくギャン泣きされた両親は私を連れ戻そうとしたが、何故か山の別荘にたどり着けないので助けを求められたそうだ。

思っていたより幼稚な内容で助かった、だが。

「一つ言っておくけど、私は既に勘当されてる身なの。ネットで確認して私の情報のロックと改竄の制御もしてあるし」

「ハ？」

「どうやっても私は戻らない。痕跡も残らないように彼処にいた情報は全て消したものの」

手を組んで肘をたてそこに顎をのせた。気分は碇ゲンドウである。

「情報の破棄は得意だ」

「コエー、なにこのガキコエー！あーもー、わかった！白鳥家がここに入れないのは呪いとして処理、そして解除は白鳥家の汚職のせいなのでどうしようもないと言うことにする」

「おじさんの物分かりが良くてよかった。そうでなかったら国籍抹消してやろうかと」  
「あー！あー！コエーこと言うなって！！冗談に聞こえねえ」

おじさんをからかうのはとても楽しい。そのあとこれからのことを話し合って、いつのまにか昼になったので昼食を振る舞ってあげることにした。

『ぬしの飯はいつも美味よ』

「ありがとうございます！」

「うちの料理番よりうまいな」

『当たり前じゃ、雪は良き子ゆえ』



(こいつら親バカとマザコンに見えてきた)

## 能ある鷹は爪を隠すが捨て子は研ぎ澄ます

あれから1ヶ月がたった。

その間はひたすらこの世界の知識を、不正に入手または発信して情報屋として活動している。

この世界、私が前いたところよりインターネット系の技術があまり進んでないから今のうちに集めてしまうことにした。私に盗めなかった情報はなかったし、へまをして捕まることもなかった私の技術からすると赤子の手をひねるより簡単であくびがでてしまう。

私は前のところでも表と裏の境目にいる、ある意味一番ヤバイ奴等と一括りにされながら生きていたからこんなの目を瞑っていたって完璧にこなせる。

話は変わるが、実はこの家地下室があつてその入り口はなんとベツトの下。最近発見したので、中を整理して金庫を発見。

何と中には白鳥家やその他大手企業などが不正の限りを尽くした証拠が入っていた。それを綺麗にファイリングして、その横にこの世界の暗黒面全般が分かる書類をしまった。

それいがいの私の生活スタイルは変わっていない。

朝の散歩をして、ご飯食べて、クラッキングして、空の神様が来たら訓練。

しかし最近藤本獅郎がたまに遊びに来るようになった。年齢に合わせた教材と玩具を持参して。

子供のおもちやつてすごいね、初めて遊んだんだけど意地になつて遊ぶくらいには楽しい。でもこれつて精神が体に引つ張られているからなのだろうか？

だつて空の神様と一緒に遊んでくれるけど、藤本獅郎は生暖かい目で眺めてるだけだから。

今も私が積み上げている大量の積み木に頬を引きつらせながらも、どこかその目は生暖かい。すこしイラつとしたから聞かれたくないであろうことをつついてみようと思ふ。

「そうだおじさん、白鳥家の件はかどつてるの？」

「ああー、それなあ」

どこか疲れたように息を吐くおじさん。白鳥家はかなり姑息で意地汚いし、おじさんの思いもよらない凶悪さもある家だ。

その白鳥家が私をさがして祓魔師まで動かした。それを納得させるための汚職の証  
拠はつかめたのだろうか？

「巧妙に隠されていて日本支部の奴等はお手上げ。どこで拾ったのか子飼いの祓魔師も  
いて、使い魔も追い払われる」

「ふーん」

「ふーんってなあ、はつきり言つて息詰まつてるつてのに呑気なやつ。それに時間もな  
いってのに」

この様子じゃあいつ白鳥家が強行してくるかわからない。しょうがないか。

遊んでいた積み木の城3mを片付ける。

そしてベットからあまる布団をめぐって、カモフラージュの武器入れをよけた。

「うわ、何コレ？デリンジャーにガトリング、ライフルと手入れ一式に改造もできそうだ  
な……消音もあるし、こんな凶悪なものどうした？」

「空の神様にもらったり、報酬の代わりでもらったり」

かごに入れておいたただけだから、普通に見られてしまったけど普通の人は使えないようになつてると言うのと、あちこちさわって弾がないことに気付いたようだ。

「それは特殊だから私専用なんだ」

「成る程、グリッブと銃身も強化してあるようだが……」

「対人のせんも考えて、衝撃に強くした」

「えげつな」

話ながらピッキングを終える。

「お前……」

何か犯罪者を見るような目で見られてるけど、気にしない気にしない。今更だし。地下へ続く階段を降りて暫く。2、3階分は降りた頃やつと部屋へたどり着いた。

換気口以外温度を左右するものはないので、地下ゆえとても寒い。息が白む。

ここは上の階より広くつくつてあり、4対1に区切られており手前の方が狭い。狭い方は所謂地下牢となっており、折檻用の道具と見張りのための机と椅子のみ。

「おい、おい！なんじゃこりゃあ……」

「そう思うよねえ、私も一回しか使わなかったけどさ、血の跡がしつこくて使いもんにならないの」

「待て」

「その人、殺人鬼だったから、空の神様に言っただけで神隠ししてもらったんだけど」（それ以前にどうやってここまで？）

何やら考えている様子のおじさんをほおって、奥に進んで行くと様々な実験道具と祓魔師のための本などが、ところ狭しと並んでいた。

「ここは単に私が集めたものだから問題ない。ルミノール反応なら私の物しかでないと思う」

「お、Sランクの聖水じゃんこっちは銃弾？いや栄養剤と麻醉弾か」  
「漁るな」

一声かければ不満そうに少し離れた距離をつめてきたので、さらに奥に進みキヤス

ター付きホワイトボードを置いてある壁際までつくとおじさんは不思議そうにこちらを見下ろした。

「このワケわからん論理が証拠になんのか？」

「これじゃない」

そう言ってホワイトボードを避けた。

## 捨て子と秘密の地下室あるいは本性のひとかけら

現れたのは1m四方の黒い壁。

中央には小さな扉があつて、開くと何やら電子画面のようなものとパスワードを入力するための何も表記のない12のボタンがある。

「?、パスワードはわかるがこの画面?はなんだ?」

「コレもパスワード」

電子画面もどきも12に区切られていて、聖法をこめながら指をスライドさせる。聖法に反応する特殊な素材を使っているから私しか使えない仕様だ。

あと同時進行でやらないと警告音が家中に響いて地下への通路が封鎖されるので、自滅する恐ろしいプログラムも組み込んである。

まるで違う生き物のように動く私の指が気持ち悪いのか、おじさんは静かだった。入力が終わった直後、部屋全体に機械音と歯車が軋むような音が響き渡る。



「……壊れてないか？」  
「仕様だ」

この金庫はお気づきの通り私が魔改造したものだ。3段に別れていて、上二つには個別に扉がついている。が、今日は一番下の気安く置いてあるもので充分なのでスルー。ちなみにオートロック。

上の数枚をとってポイツとわたす。

無言で目を通すと、パシーンと書類で頭をはたかれた。はて、何かしたか？

「こんなもん有るならさっさと出せ！」

「あとでコピーし終わったら返してね」

「ハア、わかった」

「あとコレもあげるよ」

部屋のすみにあるどっから見てもゴミ箱の中に手を突っ込んでその中の一種類を出す。

「鍵だ」

「！」

祓魔師の世界では必需品であり、鍵がなければたどり着くことのできない場所があるほど重宝されている便利なアイテムだが、一般人には全く知られていない魔法の鍵である。

いくら空の神様と過ごしているとはいえ、一般人であろう私がついているには不自然だ。おっと、おじさんの眉間に大きなしわがよっている。

「クラツキングしたら一発で製法が出てきたぞ？ 愉快なことだ」

「お前、何もんだ」

明らかに警戒しだしたおじさんに今更な反応だと笑いながら、ここ最近始めた仕事の営業をする。

「いつもご利用ありがとうございます、あなたの悪魔バアルでございます。本日はどのような知識をお求めでしょうか」

お決まりの文句です。

するとみるみるうちに変な顔になっていくおじさん。

「お前！あの人か悪魔かわからんやつか！態々悪魔の名前をコードネームに決めやがって！散々調べさせられたんだからなあ!!」

「全てブロックした。やり過ぎたと思ってるけど悪いとは思ってない」

「思えよ！」

「聖騎士って言っても社畜なのか」

「言うな」

そこからは早かった。

白鳥家を取り潰されることはなかったが、騎士団に弱みを握られたも同然の白鳥家は暫く静かになるだろう。

6歳になったとき、学校に行く行かないで山の皆とおじさんの間で小さな紛争が起き

た。その様子はさながら地獄絵図と言って差し支えない凄惨なものだった。

私を人間の巣窟にやりたくない山のみんなVS普通の子供と同じように扱うおじさんはなかなか決着がつかない。なので偽の保護者を作り上げて教員免許をもつ貧乏な家の長男と言う設定にした。実際に貧乏な大家族と交渉して給料として大金を払っている。

そうすればその偽の保護者に教えてもらおう、と言うことになるため学校に行かなくても良いとなるわけだ。

私が山の皆よりおじさんをとるわけないだろう。

「っておい！お前本当にグレーだな!!」

「誉めないで」

「誉めてねえ！」

「でもいいじゃん、私の拘束される時間がない方が忙しいおじさんも助かるでしょ？」

「……言い返せないのがつらい」

素行が悪めで有能すぎのおじさんは、馬車馬のごとく働かされていて最近では情報通にもなってきた（私のせい）からか更に忙しいらしい。

上司に逆らえない社畜過ぎてたまにボロボロになっているけど、怪我してないあたり有能だなと思う。

「もうそろそろ空の神様が来るから帰ってよ」

「いや、今日は訓練とやらも見たいこうと思つてな」

「ついでにご飯も食べたいだけでしょ」

「まあそう言うなよ」

「全く、しょうがない大人だ」

そんなこんなで空の神様とおじさんに鍛え抜かれた小学校時代。

さすがに人と接する機会が少なすぎると言うおじさんに、空の神様が賛同してしまいおじさんが神父をしてる男子修道院へ鍵で移動のち登校と言うことで中学校はおさまった。

## 捨て子と悪魔の子の入学式

私は今世初の体験をしている。

原因は目の前に男子生徒の制服を掲げているおじさんだ。私に息子はいないのだが。

「おら、コレお前の制服」

「諸々の面倒ありがとう、でも何で男子用？」

「は？お前男だろ？……男だよな？」

初めての性別を間違えられた。

そういえば、おじさんが買ってくる玩具のなかに人形は含まれていなかった。

おままごととかお絵かきとか淑やかな遊びはなかった。初めから勘違いしていたらしい。

「……まあいつか」

「変なやつだな、いきなりどうした？」

「何でもない」

「じゃあ来い、俺の息子を紹介してやる！」

歯を見せて笑うおじさんはとても楽しそうだった。

……よく考えたらこれから主人公に会うんだな、何か変な感じ。

さて、人生初の友達作りといきますか。

「燐、雪男、こいつは白鳥 待雪。これから同じ中学に通う仲間だ、仲良くしろよお！」

「ー！」

目の前に青い目の双子がいる。

まだ幼い黒くない雪男君と、そんなにスレてない燐君。

何か楽しみになってきた。友達とか作ったことないけど。

「お、俺は奥村燐！で眼鏡が双子の弟の雪男だ！好きな食いもんはスキヤキ、よ、よよよろしくな!!」

「雪男です、よろしくお願いします」

「よろしく」

「よーし、てめえら自己紹介はすんだな？これから入学式だ、さあ行つた行つた」

遅刻するぞおと脅してくるからか双子が慌てて鞆を取りに行つた。

「なんか、楽しみになってきたよ」

「！、そうか」

入学式は退屈だった。

新入生代表はやっぱり雪男。優等生然とした挨拶をして少し緊張ぎみに礼をして下段していった。そのあともお決まりの長い話が続いて寝かけたころにやっと入学式は終わった。

教室へ向かう道中雪男君を見掛けたので声をかけると勢いよく振り向いてガツカリされた。



「なんだなんだ、失礼だぞ？」

「あ、すみません……あの兄さん見ませんでしたか？」

「見てない……」

「もしかして！」

二人で元来た廊下を戻る。

入学式を催していた体育館に近づくとつれて、会場から困ったような怒ったような声が聞こえてきた。

保護者の方はすでに退場した後だった。

「兄さん！」

「隣君……ホントに寝てた」

学ランを気崩していたから、目付きもあいまって不良と思われる誰も声をかけなかったのかな？

地元では有名らしいし、しょうがないか。

「兄さん、起きて！」

「隣君、起きないと金的だ」

「「!!」」

「起きた！起きたから！その拳をおろしてください!!」

その場にいた全ての男性が青ざめた顔で見つめてくる。一回やってみたかったから少し残念だと思いつながら、渋々振り上げていた手をおろした。

「さて、行くよー」

「ハイ！」

（こわ！なにこの人!?!）

流れに乗っていけばクラス割が張り出されているところに迷わず行けたはずだが、そんな悠長なことをしているとHRが終わってしまいそうなのでテキトーにそこら辺にいる先生を捕まえてクラス表の場所を聞く。

「君、奥村兄弟と白鳥 待雪だろうか？それなら3人セットでAクラスだよ。ちなみに場

所は3階上がつてすぐ」

「ありがとうございまーす」

途端に元気になって駆けだす隣君を宥めながら、クラスの前につくともう自己紹介が始まっているようだった。

「どうする?」

「はやく行こうぜ」

「でもそれだと今自己紹介してる人の邪魔になるよ、兄さん」

「あ、そっか」

「じゃあ今やつてる生徒が終わり次第突入でいい?」

「おう」

「うん」

なんか、これからバカやるのが見え見え。

ワクワクする!

「ハイ、次のせ」

バーン！

先生の言葉を遮る形で、燐君から突入。次に雪男君、最後に私。

「……ようやく来たか」

「へへっ居眠りしちまってよー、俺は奥村燐！趣味は料理で好きなものはスキヤキ！よろしくな！」

「……弟の雪男です、兄共々よろしくお願ひします」

「白鳥待雪、まあ、よろしく」

1人目は思いつきり不良スタイル、2人目は新入生代表の優等生、3人目は美しいパーマを腰まで伸ばした不思議な生徒。

突然の襲撃に、クラスメイトたちは方然とした。

が、3人とも顔はいいほうなので疎らではあるが、拍手が届けられた。

「お前ら、席は最前列3つ隣り合わせである仲良く決めろよー」

話し合うまでもなく、燐君が真ん中に座ってしまったので教卓の真ん前が燐君、その左が雪男で右が私だ。

「……仲良いなお前ら」

とりあえず、今すぐ帰りたいから早く進めてほしい。

## 悪魔の子は捨て子を恐れる

HRが終わり、大量の教材を抱えて僕たちは帰っている。いつもと違うのは、歩く通学路と隣に兄さんだけでなくその向こうに、白鳥 待雪というこがいることだ。

重すぎる教材をリュックとサブバックに分けていたけど、体力がない僕は途中から兄さんがサブバックを持つてくれている。白鳥君は全体的に線が細くて筋肉のきの字もない体で、非力そうなのに涼しい顔でサクサク歩いているから内心すごく驚いている。ちよつと羨ましいな。

藍色の長い天然パーマをゆらす彼は、今朝突然神父とさんが連れてきて紹介してきた。最初は繊細なイメージがあつてまるでオフィーリアの姿絵のような神秘的な存在だった。優しい声もあいまって第一印象の願望が仕事をして比較的話しやすかつたけどどこかイメージと違った。それはすぐにわかつたんだけど。

彼は存外傲慢で自己中だ。

僕だつて人のことは言えないけど、白鳥君は自由に思考して好奇心で動いている。傲慢ともいえる自信と誇りを持っている。

……3年間平穩に過ごすことは無理そうだ。

今だつて着々と不良たちに囲まれ始めているのだから。

「おうおう、ちつと面かせや奥村ア！入学式の帰りかあ？浮かれてんじやねえぞお!!」

燐君にガンつけながら唾を飛ばす今時古いリーゼントヘアの不良その1。他にも短ランに特攻服にモヒカンと古すぎるラインナップで10人ほどで周りを囲まれ、脱け出すことは難しそうだ。

雪男くんは顔を真っ青にして、眼鏡の奥の目を恐怖でゆらしていた。小さく震える手を固く握りしめて、しかし不良から目は離さない。少し感心した。

「誰だお前ら」

喧嘩を売られた張本人である燐君はというと、鼻をほじりながらこの言いぐさ。恐らく前にも喧嘩を売られ圧勝し根に持たれたのだろうが、その返答は火に油を注いでいるだけだ。

「こんの、なめやがって……!」

「はあ? 飴なんか食べてねーぞ!」

……このアホどうにかならないのか?

しょうがないから雪男君の腕をつかんで、燐君と私で守るように背を向けサンドイッチ。燐君は前を見たまま、私は背を向け後ろを。

雪男君の腕は明らかに喧嘩する人の筋肉の付き方ではなかったが、全くないわけではなく銃を撃つには適した筋肉の付き方だ。もう数ヶ月もすれば祓魔師の試験に合格して歴代最年少の祓魔師となるのだろう。

「し、白鳥君!」

「まあまあ、ここは私も参戦しようじゃないか。ついでに次に苗字で呼んだら金的な」  
「え!? や、あ、えつと、はい!」

ちよつと睨んだら良いお返事がもらえた。鍛えてる割に小心者だな。

少し考え込んでいる間に燐君と不良たちはヒートアップしていたらしく、背に雪男くんがいることを意識してか穏便にすまそうとしていた燐君も我慢の限界らしい。



「てめえ！いい加減にしろお!!」

「おめえが覚えてりやあここまでキレてねーよ?」

あ、ギャグはいった。

だが遊んでいる暇はなさそう。さっきの言い合いの直後、不良が燐君を殴った。無論やられるだけの燐君ではないので直後に強烈なストレートが不良のみぞをとらえていた。それと同時に子分らしきその他が殴りかかってきたから、思わずデリンジャーだしそうになって焦った末回し蹴りで3人ほど吹っ飛ばしてしまった。

「あ、加減を間違えた」

やってしまった。後悔先に立たず。

クリーンヒットしたやつは立ち上がることも出来ず呻いて、吹っ飛んだ弾みで顔面強打。鼻血がでている。

他の2人は、仲間を巻き込み打撲多数と言うところか。

「お、おい、奥村燐……その天パは何モンだ」

「知らねえ！」

「ぐぼお!」

あ、燐君話し始めた不良にお構いなしで攻撃しに行った。容赦ねえな。

その後、雪男君を人質にしようとした頭の悪いバカどもを燐君とボコして、電柱に吊るした。

「絶景哉！」

「腹減ったー早く帰ろうぜ！」

「え?この人たちこのままでいいの?」

「気にすんな」

「……うん、そうだね」

いつのまにか消えた私への敬語に、ちよつとした満足を感じながら男子修道院へ帰った。

修道院につくとおじさんが門の前で仁王立ちして私たちを迎え入れてくれる。ほか

の祓魔師である神父さんたちも皆笑顔で迎えてくれた。

……帰る場所に人がいるのも悪くない。

「燐、お前その頬どうした」

「ほわ!? べ、べべつに喧嘩なんかしてねえよ!」

「兄さん……」

「誤魔化す気あるのか……?」

「燐! またおめーは喧嘩して、どうしてそう手が出んだ!!」

「バシーン!」

「いってえ! 人のこと言えんのかよ!」

「口答えしない! ついでに白鳥!」

「ん?」

「お前がついていながら何で喧嘩になる!」

スカッ

「2度はくらわん」

「すっげえ! じじいの攻撃避けたぜアイツ」

「ちよつと残像見えなかつた？」

## 初めての渾名と勉強

なぜか金曜日にあつた入学式。

今日はその翌日、土曜日である。休日の今日、私は男子修道院へと訪れていた。

「ここが一応お前の部屋だ」

ダミーとして、友達呼んだりするときに必要なだろうと部屋を1つ貸してくれた。勿論有料で。最初は無料提供の体で話が進んでいたがさすがに悪いとゴリ押しした。下宿しているようなもんだし。

それにしても、本当に私の性別を勘違いしているようだ。修道院の他の人は気付いている人もいて、苦笑いを隠せずにいる。

あてられた部屋は6畳ほどで、ベッドと勉強机があつて大きめのクローゼットは助かる。ここに学校用のコートやジャージ等を入れておく。

「寝る前とか、あつちに戻るときは確り鍵を閉めるように！」

「わかった」

おじさんはよく私の世話を焼いてくれる。何だかんだいって冷酷になりきれず、情が移ってしまえば切り捨てられないお人好しだ。

その強靱な身体と精神を守るように。

「おじさん」

「ん〜?」

「コレあげる」

渡したのは空の神様の爪でつくったお守り。見た目はそこらへんに売ってるお守り袋と同じだけど性能は桁違いだ。悪いものから装備者を守護して、跳ね返してくれる。

空の神様の爪はのびるのが早いから、家に沢山あるものの1つ。

「!」

「壊れたら教えてね」

「ああ、サンキューー!」

齒を見せて笑うおじさん。笑顔があの子とそっくりなことに、心で笑った。

自室についての話がひと段落した後、居間というより共有スペースといえる部屋に連れてこられた。そこには双子の兄弟がそろっていて、私たちが部屋に入ってくるのを認めるや否や走り寄ってきた。

「マツ！これからよろしくな！」

「マツ君、よろしく」

「マツ、？」

耳慣れない言葉に首をかしげると、燐君が心得たとしてもいうようにいきいきと説明してくれた。

「待雪って長いだろ？雪だと雪男とかぶるからマツ！」

渾名をつけてもらった。

実を言うと、フルネーム全て気に食わなかったので嬉しい。

「これから一緒に住むんだろ？ここ案内してやるから来いよ」

「ああ、ありがとう」

「じゃあ神父<sup>とう</sup>さん、僕たち行くね」

「おー、仲良くな〜」

「「はーい」」

結果双子とは結構仲良くなれた。

院内の施設説明は30分くらいで終わり居間に戻って談笑していたが、恐らく近いうちに実力テストがあると私が言う<sup>と</sup>雪男君発案勉強会が開催されることになった。

まあ案の定……

「わ、わかんねー！」

「兄さん……実力テストはある程度点を取っておかないと、目をつけられるよ？」

「もう手遅れな気もするけどね。……さて、何がわからないんだ？」

「ま、マッー！お前だけがたよりだ！」

「しょうがないんだから……僕も聞くよ」



「お前ら良いやつだ！ありがとなっ」

いやいや、お前がな。

だが自分のために誰かが動いてくれることは幸せなことだ。そして今までの生で憐君はそれに気づいている。3年後、私の存在が2人にどう影響するかわからないが本音で話せる程度には、この双子の壁を叩き潰そうと思っている。

それに憐君の不良化を押し返すことができれば、おじさんがサタンに手を出されることはないかもしれない。ま、空の神様のお守りがあるから、間違っても死なないけど。壊れた欠片でも強い魔除けに成る程聖法で力をこめた。もはや飽和状態で見える人が見ればほんのり光って見えるだろう。

「……兄さん明日も勉強ね」

「ハイ」

「とりあえず、寝る前にこの漢字書き取りして」

「！サンキュー」

「おーい、お前ら晩飯だ！」

「「はーん」」

月曜日

「おはよーさん、今日は実力テストやるぞー。さあ怠けた頭をたたき起こせ！」

「うっしやあ！二人のおかげでやれる気がする」

「まさか本当にあるとは……僕も勉強しておいてよかった」

「予想的中、3人で上位埋めような」

「おう／うん！」

（（え？白鳥って何者？））

教科は主要科目5教科。

10分休みは次のテストに出る要点を確認して、答え合わせは二の次三の次。時は金なり！

そんな私たちを違う生き物を見る目で、クラスメイトたちが見ていたけど気にしない。

先生が私の話すたび凝視してくるけどキニシナイ。

実際小学校は勉強とか必要ない範囲だけど、皆で勉強楽しいから気にしない。

「おい、順位張り出されてるぜ！」

「ホントだ……ここからじゃ見えないね」

「そう？ 私は見えるが。上位50名分だけみたいだ。総合点数も書かれているな」

気軽に話しながら近付いていくと、モーセの十戒のごとく人垣が割れて道ができた。人垣の間を3人で歩きながら心なしか小声で話す。

（（なにコレ？）（））

「どうしたんだコイツら？」

「さあね」

「あつ兄さん、マツ！」

ちょうど順位表が見える距離になったとき、雪男の驚愕した声が。その視線の先にある順位表に目を向ける。

1位	白鳥 待雪	500点
2位	奥村 雪男	498点
3位	奥村 燐	480点

「まつ、ゆきお……おっ俺!？」

「おめでどう兄さん!まさか本当にこんな上位にはいるなんて夢みたいだ!」  
「燐君おめでどう!勉強頑張ったもんな」

（（逆じゃないのか?））

## 小さな結び

実力テスト以来、私たちは毎日1時間その日の復習と確認テストと予習をするようになった。私と雪男君力作のノートで燐君も問題なく学習できている。

そのおかげか、燐君は成績優秀素行不良といった面白い評価をもらっていた。

雪男君はというと……

「凡ミスがなくならないっ満点とれない……」

「雪男君、お茶のむ？」

「お願い」

この通り、負けず嫌いを発揮して問題と悪戦苦闘中。実力テストで私に負けたのがよほど堪えたらしい。しかし言葉の通り若干スランプ気味である。贅沢な話ではあるが。

この勉強時間1時間と決めているのは、燐君は集中力が毎日そう続かない、雪男君は祓魔師になるための勉強があるはずだ。たまにおじさんと出掛けていくから、忙しいだ

ろうという配慮から。

私は勉強が終わると夜の散歩へ出掛けて、帰ったら鍵で山の家に帰る。風呂もこつちではいるから、今のところ問題はない。双子には扉のノブに sleepとかかかっていたら、寝ているから鍵もかかっていると云ってある。

「終わった！マツ、丸つけ頼む！」

「はい、はい」

「僕のも」

「早いな」

燐君も解く速さは少し遅いが満点を出し始めていて、雪男君は焦っているようだけど楽しそうだ。今まで追従をゆるさない差で1番だったようだし、張り合えないとつまらないよね。

今日は2人とももう予定はないので、居間でテレビを仲良く見ている。

「ぎやははは！やべーっはらいてー」

「ハハハ！や、やめてくれ面白い」

「ほえふうふあ?」

「……何食べてんの?」

(何言ってるかわかんないし)

コレ食べる? って聞きたかったんだけど、飲み込み忘れてて自分でも何言ってるかわからなかった。

食べていたのはマドレーヌ。弁当にいれるアルミカップを使って作ったもので、ホットケーキミックスを使えば簡単に出来る。大皿にいっぱい出来たから皆で食べようと思っただけだ。

「燐君、よだれ」

「わり」

「雪男君も」

「あ」

「2人とも、いっぱいあるから落ち着け」

さつき焼き上がったばかりだから、とても良い香りがする。修道士の方も香りにつら

れて部屋から出てきた。

沢山つくつてよかった。普通に消費されそうだ。

もはや戦争だったな。

「うちは飯なら作れる奴が多いんだが、どうにも菓子は訳が違ってな」

とは料理番の弁。

修道院はおじさんのポケットマネーと一部の寄付金で成り立っている。皆男だから食費もばかにならない、生活も節約して遣り繰りしていてそんなに買えるものでもないから甘味に飢えていたそうだ。

ネットのレシピ通りつくれば問題ないはずなのに、一度オーブンのなかで爆発して以来は諦めたと言われれば、もう何も言えなかった。

「よし、マツはお菓子係な」

因みに材料費は私持ちだ。これくらいは痛くも痒くもないので、許容範囲内だ。家族のなかも深まって、悩みを相談できる場も出来て一石二鳥だな。



私は家族団欒という癒しを眺められてむしろ三鳥得ている。

「おくテメーら俺に黙ってなあに食ってんの？」

「父さん！マツがつくつてくれたんだぜ」

「おいしいよ」

その後残り少ないマドレーヌを巡って食いしん坊たちによる第一回お菓子戦争が繰り広げられた。

翌日登校中、少し長くなってきた前髪を気にしつつ燐君が私に問いかけてきた。

「マツ、お前髪切らねーの？」

「燐君、髪はね長いほど便利だよ。呪いとか、対価のかわりとか、冬は温かいとか」

「最後以外変だよ、マツ」

「気のせい、気のせい」

因みにこの長髪天パで何度か生徒指導室に呼ばれている。普通に無視したけどな！  
入学時に地毛登録なるものをしてるのに難癖つけられる謂れはないし、髪を切れと言われたって切る気はないから行かなかつた。後悔してないし悪いとも思っていない。

「おゝッス」

「おはようございます」

「はよー」

上記が教師に対する私たちの挨拶だ。燐君雪男君私の順だ、わかりやすいだろ？

「おはよう、問題児トリオ」

「雪男も!？」

「雪男君って優秀だし素行も良いから、とやかく言い辛いんだろ」

「心外です、先生」

なんか黒いものを背負って先生にこお、と微笑む雪男君。こわやこわや。

成績優秀で素行優良の雪男君だが、ふざけたり羽目を外すことに最近躊躇いがなく

たつてきている。私と燐君が何かやらかそうとしてもしれつと見ぬふりして陰で笑ったり参加してきたりもするからな。先生も察してきているようだ。

「白鳥、放課後生徒指導室に来ること」

「先生ー、早退します」

「すまん、先生が悪かった。意味もなくサボらないでくれ！」

「この先生面白い。」

（マツのやつ楽しんでいるな）

（先生も面倒なのに目をつけられたね）

（マツには逆らっちゃダメ、絶対）

## 初めての学校生活

入学して一月、私たちはいつも3人で行動していた。いや、最初はそこまでではなく自由にクラスメイト達に混じっていたのだが、いつのまにか目を離すと燐君は不良に絡まれて怪我をするし、雪男君は女の子に囲まれて授業に遅れるし、私は持ち込んだノートパソコンで仕事を始めるので3人で話し合った結果こうなった。

かたまっている絡みづらいし、あからさまに3人とも他と態度が違うので身の程を知るらしい（先生談）。

さて、今は数学の時間だ。

私たち3人とも居眠り中である。最前列教卓の目の前で、堂々と。

雪男君は背筋を伸ばして、燐君は腕を枕に鼻提灯、私は枕持参である。

「……おい問題児トリオ」

無論浅くではあるが、私も寝ている。

先生へ返事する気などないので意識をさらに沈める。と同時に敵対心を感じて拳を

出すとその先には先生の腹があつた。

悶える先生。

「何してるんだ……」

「ぐう、いたたた……堂々と、居眠りしやがって」

「あ、わるい。敵対心向けられるとつい手が出るんだ」

キーンコーン　カーンコーン

鐘がなり授業の終わりを告げるなか、中途半端な板書をそのままに職員室へ帰っていた。先生の背中では、なぜか小さく見えた。本当にすみませんでした。

なんで雪男君まで居眠りしているかというと、昨日おじさんと隣君がゲームをやっていた。居間で。それに巻き込まれた私と雪男君。そこからノンストップデスマツチである。

「二人とも起きろ、昼だ」

「す、スキヤキー？」

「おはよう、マツ」

「ほら、飯いくぞ」

「おう／うん」

この中学は数年前、給食費を払わない親が続出し給食センターと学校で話し合いが行われた。その結果、対策として給食がなくなり購買が充実。弁当持参となっている。

今日は天気が良いので、中庭でレジャーシートをひいてランチでもしよう。

「まさか居眠りする日が来るとはね」

「マツなんか枕持ってきてるしな！」

「いつも寝てる隣君に言われたくないな」

隣君は大抵寝ている。が、夜に私たちによつて鬼のように勉強内容を刷り込まれるので、勉強が出来る。

「マツだつてあまり起きてないよね」

「小学生時代に勉強しすぎたんだ」

「「引きこもり？」」

「、ある意味？山から出なかつたし」

(（どういふ生活だよ!?!）)

今日はおじさんが弁当を作ってくれた。

男の料理ってかんじだけど美味しい不思議。

「もう少しで定期テストだね」

「その後は球技大会だっけか」

「そのあと夏休みだ」

夏休みというワードに隣君は目を輝かせ、雪男君はげんなりした顔をした。

「海いきてー!」

「日焼けするから嫌だよ」

「女子か」

「……赤くなつて痛いんだよ」

「日焼け止め買いにいくか」

「それだ」

こうやって馬鹿やっていると、あと3年もしない未来で大人の事情と避けられない運命に弄ばれるのかと思うと、少しやるせない。

柄でもないけど、この2人に絆され始めている私はまずおじさん生存からはじめている。

原作とか、あまり考えていない。さわりしか知らないし。

情報収集は得意分野だから、少しくらい反れたって何ら問題はないんだ。

だからさ、

「お前らは好きなように生きろよ」

「何だいきなり」

「突然だね」

「いや、馬鹿やってるお前らの方が面白いから」

「どういう意味だそれ」

笑って誤魔化すとタックルされそうだったので避けると、燐君は雪男君を巻き込んで



レジャーシートの上で転がった。

「あーあ、片付けよろしくな」

「まてコラー！」

「兄さん……オモイ」

「あ」

このあと雪男君に怒られた。

解せぬ……

「マツ！リベンジだ、ゲームやろうぜ」

「燐君、おやつは要らないようだな」

「やつばなんでもねー！父さんがしてくるな」

「さつき悪魔払いてたからもうそろそろこっちくるんじやないか？」

「んじや待つてよ」

今日のおやつはカップケーキ。オレンジピールとかチョコチップとかアーモンドなど種類を揃えれば飽きることはないので量産中。おてがるでよく作るお菓子のうちの一つだ。

私の横に立ってじつとこちらを見てくる燐君に居心地が悪くなって、やってみるかと言うと、犬の耳と尻尾が見えた気がした。

「燐君いれすぎ、あんまりいれると生焼けとか出てくるから気を付けて」

「うー、こんなもんか？」

「そうそう」

このあととんできたおじさんが燐君作のカップケーキを食べ尽くして、皆にボコられてた。

食べ尽くされた燐君は嬉しそうだったから、私のカップケーキで不満かと聞けば大人しくなったので、今度は雪男君もさそって3人で作ろうと思う。

## 聖騎士の独白

待雪が来てから修道院は変わった。こいつに会う数年前から養い子としてひきとつた悪魔の落胤である双子には顕著にその変化が表れている。

兄の燐は悪魔の血を強く引き継いでおり超人並みの怪力を持って余してグレかけていて、どうしたものかと思っていたがそんなもん関係ねえとでも言うように、アイツはぶち壊してくれた。友だちになってくれた。

反対に弟である雪男は塞ぎ込みがちで体も弱く、本音で語ったりしない。勇気がない、自信がない、自分はいいやと思う反面負けず嫌いな所もある面倒くさいやつだけど、自由と好奇心の化身とも見える待雪と接することになにか吹っ切れたようだ。

まるで一番上の兄のように、あの双子を甘やかし教え導く待雪には感謝してもしきれない。あいつにこんなこと言おうものならば常人ではないものを見る目で俺のことをばかにするのだろうがな。

まだ一月、されど一月。

この短い期間で、おやつの時間をつくって団欒の場をつくってくれた。

徹夜でゲームなんて4人で意地の張り合いをして、父と子の時間を増やしてくれた。

すれ違っていた俺たちが、待雪によって一つの家族として強い繋がりが出来ていく。今までだつて俺なりに家族としてふれあい愛情を示してきたつもりだったが、上手く行かないことが多かつた。

俺は不器用で子供の扱いなぞ知らず、俺ではどうしようもないことの方が多くて……情けないが、アイツを思つてここに迎えたのに逆に俺の方が世話になつている。

「おじさん、今日は燐君も手伝つてくれたんだ」

籠一杯のカップケーキの山を燐と一つづつ持つて表れた待雪。漂う甘い香りに誘われ既に待機中の俺たちに苦笑いして見せる待雪の隣にいる燐はどこか落ち着きなくそわそわしている。

よく見ると確かに均一にトツピングされ膨らんでいるものと、量がまちまちでたまにトツピングが混ざつているものがある。

うちの男たちは菓子子の才能はないからなあ。

もう燐が作ったやつは半分も残っていないだろう。にやりと笑えば楽しい時間の始まりだ。

「よし、隣がつくつたのはこれかあ？」

「な、何でわかんだよ!？」

「だって兄さんのは見た目がちがうじゃない」

「あ、ほんとだー」

「やっぱり」

「まあまあ、食べよう皆。おじさんに食べられてしまうぞ」

……魔神よ、俺の身体と精神が尽きることがない限り、ここは譲らん。  
サタン

壊れかけていた俺たちを俺の息子たちをその手で直してくれた、たまに遠い目をして何か深く考え込む待雪。その後は決まって何かを決意した顔になる。

12のガキのする顔じゃねえ。

お前はどこまで知っているのだろうか。全て知っていてなお、こうしてここで息をしているというのならあと少し俺の我儘に付き合ってくれや。

菓子を頬張る皆を眺めながら珈琲を飲んで。自分はあまり好きではないのに菓子をを作るガキに、抱きついて頭を撫でまわすと迷惑そうに毒を吐かれた。

でも逃げない辺り嫌ではないのだろう。

俺にもお前を甘やかさせてくれ。

血のつながった家族という人間に捨てられて悪魔と生きるお前に、人というものを知ってもらいたい。

優しいお前に優しさを知ってもらいたい。

頼られるお前に頼ることを知ってもらいたい。

まだ、お前は子供だよ。

「おじさん、苦しい」

いつの間にか腕に力を込めすぎていたようだ。

そこに燐と雪男が、左右から抱きついてきた。

腕の中から悲鳴が聞こえた気がする。お前から以外と力ついてきたなあ、俺も苦しいぞ。

そのぬくもりを堪能しているとカシャリとシャッターを切る音が聞こえた。

「あ、もっかい！皆でピースしようぜ！」

「いいね、お願いします！」

「よし、お前らまとめて抱き締めてやる！」  
「だから苦しいって……」

あとから見た見た写真には、皆満面の笑顔で写っていた。

真ん中でつぶれそうな待雪も、空の神様と一緒にいるときみたいになんか嬉しそうに笑みを浮かべていることに、ちよつと達成感とか幸福感とか色々感じながら写真立てに飾って居間を出た。

あのあとまた徹夜でゲームをしたためまた、弁当をつくってやらないとな。  
今日はメフィストと呼ばれているから、暫く忙しくなるだろう。

あの悪魔め、と今からなじっておく。

## 捨て子の帰郷と双子

あつという間に月日は流れ、夏休み。

私としてはやつとである。

あの後あつたに定期テストでは僅差でまた同じ順位をとり、雪男君がいじけて三日ほど部屋から出てこなかったり、テストが終わってゆるんだ空気を熱血にした球技大会では隣君がバスケで某漫画の如くゴールをぶち壊したり、雪男君がバドミントンでネットに穴開けたり……

私？見学してましたが何か？ま、詳しくは気が向いたときにでも話すでしょう。

……とにかくこの双子、規格外にも程がある！

加減というものをしてほしかった。

「あー、やつと夏休みか」

「でも学校ないと暇だよな」

「あ、暑い……」



雪男君は暑さにやられて夏バテ真つ盛り、燐君は学校が恋しいほど元気が有り余っているようで若干羨ましい。

私はというと、

「じゃあ、私は山に帰る」

帰郷しようと思った、のだが……

「待て待て待て待て！ マツがいなくなったら誰が雪男を看病すんだよ」

「お前がやれよお兄ちゃんだろ」

「こんな時だけ年長者扱い!？」

「マツ、僕からも頼むよ……兄さんに任せられると、僕死にそうで怖い」

「そんなに!？」

燐君の信用のなさに戦慄しながらも今修道院には私たち3人以外いないことを思出した。祓魔師の仕事が突然忙しくなったようで、皆さん忙しく出勤中である。

恐らく夏休み中は帰ってられないと言われた。

ならば、

「よし、一月分の泊まり準備してこい」

「ええ？」

我が家に招待しよう。

「客間があるから寝袋等は不要だ」

「え？マジ？」

「唐突すぎるよ……」

「ほら急げ！」

「ハイ！」

私の急かす声に2人が慌ただしく準備し始める。その間に私はおじさんへメールしておくことにする。

宛名 おじさん

件名 お泊り会のお知らせ

本文 夏休みは燐君と雪男君をつれて山に帰る。

何かあれば家に来てくれ。

山は涼しいから雪男君も元気を取り戻すだろうし、自然が多いから野生児の燐君も暇はしないだろう。それに燐君は怪力をコントロールするいい機会だから、空の神様に修行をお願いしてみよう。なぜか私が来てからは怪力でアクシデントは起きてないみたいだが、備えあれば患いなしともいうしな。

雪男君は二階の書庫にでも案内しておけば大人しいだろう。医者になりたいと公言していたから、無難に医学書でもすすめておこう。何だかんだ言つて燐君のこと大好きだから一緒に修行始めるかもしれないけど。

一応居間のテーブルに、書き置きも残す。

『山に帰ります、詳しくはおじさんに聞いてください。待雪』

?  
なんだか語弊が生まれそうな文面だがまあよしとする。さあ二人の準備はどうかかな?

「雪男！漫画はいんねえ！」

「山に行くんだから漫画は要らないだろ、兄さん。それより着替えを多めに入れて」

「わかった！虫とかいるのかなー！」

「アミと虫籠は物置小屋」

「わっほーいー!」

……うん、まだ終わりそうにないな。これはあれだな、旅行前の小学生と母親のやり取りと似ている気がする。

その後も、ゲームは持っていきたいとか電気はひいてあるのかとか肉食べたいとか……

「お前らー着替えと宿題、勉強道具にゲームを持ったら玄関に集合!遅いと飯抜きだ!!」  
「それだけは勘弁してくれ!!」

仲良くユニゾンした双子たちは大慌てで動き出し、ドタバタガシャーン!と事故りながらも準備を終えた。やればできるなら早くそうしろ。

結局荷造りをはじめて五時間後に準備が終わった。準備を始めたのがおやつ直ぐ後だったので、もう夕方だ。夏だからまだ明るいけど。

「さて、雪男君は知ってるかもしれないけど、移動にはコレを使う」

そう言つて青い宝石を埋めてある銀の鍵を取り出した。

やはり雪男君は知っているようで、目を見開きついでため息をはいた。

燐君は意味がわからないと言つた顔をして、鍵と私を交互に見比べていた。

「さて行くか」

「おう？」

「はあ……」

内側から鍵穴に鍵を差し込み、扉を開けた。

「へあ!？」

扉の先を見て間拔けな声を出したのは、勿論燐君。

「本当に山だ」

見渡すかぎり木や山菜などの植物に埋め尽くされていることに驚くのは雪男君。修道院はどちらかという都会よりの街にあったから自然が少なく、二人からすれば新鮮だろう。

「2人とも、驚くのは程ほどにして今日は家に入ってゆっくりしよう」

玄関の外向きにあるバルコニーに出るように設定してある鍵なので、今しがた出てきた扉を開いて中へ促す。

「広い、天井高い」

「ほら、ほら、靴脱いだら靴棚のスリッパ使って」

「ここ、1人ですんでるのか？」

「うん。客間は二階にあがってすぐのところ」

「わかった」

開いた口が塞がらない状態の二人を見送って、私は夕食の準備をすることにした。

客間のある二階からは双子の微笑ましくも仲睦まじい会話が聞こえてくる。これは

後から擲揄つてやらねばならん。